

聴覚障がい学生支援について

明治学院大学には聴覚に障がいのある学生が在籍しており、大学では、聴覚障がい学生が十分な学生生活を送ることができるように、関係各部署が協力し必要な支援を行っている。ボランティアセンターでは、昨年度に引き続きノートテイク担当のコーディネーターを迎え、授業での情報保障を中心に、今年度は以下の聴覚障がい学生支援に取り組んだ。

1. 聴覚障がい学生本人への支援 ―授業等における情報保障のコーディネーター

本学の情報保障には、①手書きによるノートテイク、②パソコンノートテイク（以下、PC ノートテイク。今年度秋学期より開始）、③手話通訳、④教材（ビデオなど）の文字起こし、がある。ボランティアセンターでは、聴覚障がい学生（以下、利用学生）からの申込みを受けて、ノートテイクや手話通訳者の募集を行い、登録した希望者を、授業のほか入学式や卒業式、新入生オリエンテーションなどへ通訳者として派遣している。今年度の登録者数は学生 43 名、地域要約筆記者 11 名、地域手話通訳者 10 名であり、前年に比べると学生の登録数（ほとんどがノートテイク希望）が増加した。ただし、1回の授業に2名のノートテイクが必要なことに加え、利用学生が情報保障を必要とする授業時間と通訳者の都合が必ずしも合致しないことから、実際に派遣した学生数は登録者数を下回るなど、ノートテイクの数が十分でない状況がある。加えて、利用学生の学年が高学年になるにつれ専門科目が増えることで、ノートテイクの技術だけでなく、ある程度の専門知識を持った人員も必要となる。人数を増やすことと合わせ、利用学生と同じ学科の上級生や大学院生へ呼びかけるなど、今後は人員を確保するうえでの工夫も必要である。

なお、PC ノートテイクや手話通訳は、現在地域の要約筆記者や手話通訳者に依頼しているが、PC ノートテイクは、2008 年度より学生向け養成講座を実施し、学生にも呼びかける予定である。手話通訳についても、明治学院共通科目「ボランティア学」で開講されている手話講座との連携など、さらに学生に広げていく方法を模索していきたい。

ひとくちに支援といっても、聴こえの程度により利用学生が必要とする内容は異なる。また、大学の中に支援の体制があっても、それを知らない、知っていても便利さがわからないので利用しないというケースもある。環境を整えつつ、利用学生のニーズを把握しながら、今後も、個々に応じたコーディネートを行っていきたい。

2. 通訳者の育成

①ノートテイク養成講座・初心者個別研修・勉強会の実施

外部から講師を招き、5月と10月に横浜校舎でノートテイク養成講座を実施した（受講者数は合計 24 名）。それぞれ2日間連続受講形式とし、2日間の受講時間は合計6時間である。内容は、聴覚障が

いや大学における情報保障の特徴についての講義と授業を録画したビデオを使った実技など、初心者向けのものとなっている。また、養成講座に参加できなかった学生や、学期途中で新たに登録した初心者学生のために、コーディネーターが個別に研修を実施した。初心者学生については、養成講座や個別研修ののち、初回は授業を見学し、はじめのうちはベテランの地域要約筆記者と組んでノートテイクに入るなど段階を踏んだマッチングを行った。手間はかかるがこうしたきめ細やかな対応が、前年に比べ初心者学生をノートテイクとしてより多く定着させる要因になったといえる。このほか、養成講座を経て実際に現場経験を積んだ学生を対象に、秋学期授業開始前の9月に、要約を中心とした勉強会を実施（6名が参加）した。

②白金校舎近隣の小学校への学生ノートテイクボランティアの派遣

今年度、白金校舎での情報保障のニーズが少なく、せっかく身につけたノートテイクの技術を生かす場が少なかったことから、秋学期から経験者学生1名を白金校舎近隣の小学校に派遣した。実際に派遣して、小学校でのノートテイクは大学と異なり、学習支援ボランティアの色合いが濃いことが明らかになった。今後派遣の際は、呼びかける対象や募集方法など再考の必要があるといえる。

3. 聴覚障がいへの理解を深めるための啓発

①『聴覚障がい学生サポートの手引き』の作成と配布

本学の聴覚障がい学生支援の内容をまとめるものとして、手引き（教員用、本人・通訳者用の2種類）を作成し、授業担当教員、利用学生、通訳者のほか、関連部署に配布した。教員用手引きには「授業での配慮のお願い」を記載したこともあって、多くの授業で配慮が得られた。

②講演会・発表会・交流会の実施

聴覚障がいへの理解を深め、その理解を相互共有することを目的として、11月に横浜校舎で講演会（演題：“聴覚障がい学生へのサポートについて”、講師：吉川あゆみさん（関東聴覚障害学生サポートセンタースタッフ、本学卒業生））、12月に白金校舎で聴覚障がい学生本人による発表会を実施した。また、養成講座や講演会、発表会などのあとは必ず交流会を行い、利用学生と通訳者、通訳者同士が交流する場を設定した。

本学の聴覚障がい学生支援は、地域の方の力添えを得つつ、学生が学生を支え、共に学ぶという姿勢を大切にしながら続けられてきた。それが本学のよさであり、伝統であるといえる。通訳者は利用学生にとってよりよい通訳ができるよう努力し、利用学生も受け身にならず通訳者とコミュニケーションをとりながら上手に通訳を受けるといった意識を持つ。学生が互いに切磋琢磨し高めあっていくことが大切であり、そこに学生がボランティアとして通訳に入る意味もある。ボランティアセンターとしては、このような姿勢をこれからも大切にして、支援を組織化し、さらにのばしていけるように、努力していきたい。

（武村）